



## 富山のイノベーター

1

能作克治氏  
株式会社 能作 代表取締役社長

# 伝統産業をモダンに蘇らせ、 地域の魅力発信につなげる

文・江口絵理 撮影・川北武志

## 30年前に受けた衝撃

建物に足を踏み入ると、不思議な匂いに包まれる。奥の工場で炎が上がるほど真鍮を熱し、溶かしているからだ。高岡の伝統産業である高岡銅器のメーカー「能作」の本社は工場見学や製作体験が大人気で、年間10万人以上が全国から訪れる。

「ここを産業観光のハブにして、富山県の伝統産業を盛り上げていきたいんです」

能作4代目代表の能作克治さんは、富山内各地の観光情報をスポットごとに解説したオリジナルカードのコーナーを見ながらそう語った。

きっかけは、30数年前に工場を訪れたある親子の会話だった。鋳物を作っている能作の社員を見ながら、母親が小学生の息子に語りかけた。

「ちゃんと勉強しないとこうなるよ」

高岡の鋳物は400年もの歴史をもつ伝統産業なのに、地元の人ですら鋳物職人の仕事をそういう目で見ていいのか。能作社長は衝撃を受けた。

「地元の子もたちが高岡銅器のすごさを知らないことには、鋳物職人の地位は低いままだ。高岡出身であることを誇る気持ちも生まれません」

そう考え、多くの子どもに見てもらおうと見学を受け入れ続けた。3年前、とうとう、小学生のときに能作を見学して鋳物職人になりたいと思った、という若者が入社してきた。

「うれしかったですね。この30年で、地元の人の高岡銅器に対するイメージは大きく変わったと思います」

2年前、手狭になった工場と本社を移転し、体験工房やレストランを備えた観光拠点としても運営し始めた。バス会社が能作前に停留所をつくっ



1958年福井県生まれ。大阪芸術大学芸術学部写真学科を卒業後、新聞社勤務を経て、1985年に義父が経営する能作に入社し職人に。2003年に代表取締役就任。国内外展示会への出展や自社ブランド製品を開発し、鋳物の可能性を追求している。 <https://www.nousaku.co.jp>

てくれたり、体験工房でつくったぐい呑みを持っていくとお酒をサービスしてくれるお店が現れたり、自然に地域との連携が広がり始めている。

## 金属が曲がる？ 逆転の発想

能作はもともと、仏具や茶道具の半製品を問屋に納める下請けの会社だった。

「でも、自分たちが作った製品を実際に使うお客さんの顔が見たくなったんです」

まるでノウハウのないところから試行錯誤を重ね、美しく音色が響く真鍮製の風鈴を作ったところ、東京のインテリア雑貨店で大ヒット。

「ただ、高岡の問屋さんの商売を邪魔しないよう注意しました。高岡銅器を盛り上げたいのに、高岡の銅器業界を圧迫しては意味がないですから」

そしていま、能作の製品といえば、白く輝く鋳100%のテーブルウェア

やインテリア雑貨が有名だ。錫はやわらかいため、力をかけると人の手でも曲がってしまう。製品にするには致命的な欠陥だ。しかし能作社長は「いや、曲がるからこそ面白い、と考えればいいんじゃないか」と、手で自在に形を変えられるKAGOシリーズを世に出した。不思議な感触と洗練されたデザインに人々の注目が集まり、これも空前の大ヒットに。日本だけでなくアメリカMoMAのストアでも扱われ、人気を博している。

目指しているのは、日本各地の衰退しつつある伝統産業を盛り上げる。古いものを壊して新しいものを作るよりかえて大変ではないか、と尋ねると、からりと笑って否定した。

「好きでやっている仕事ですから。苦勞と感じたことがないんです」

伝統産業に新たな活路を見出しつつ、古き良き伝統も守る。能作の革新は、高岡に、富山に、日本に波を広げていく。